毎日新聞
2014年4月8日　掲載

ウチの教授　東京都市大　小林 茂雄さん

明かりで地域を活性化

「明かりを生かした街づくり」や「コミュニケーションに与える光環境の影響」が研究テーマだ。夜のとばりが下りると、街には明かりがともる。窓明かり、街路灯、門灯、ネオン。無造作な照明でなく「住民や店主らが『街の表情』としての照明を考えて明かりを設けることが、コミュニティー作りの一環にもつながる」と話す。

夜ならではの街並みに、明かりは重要な役割を担う。東日本大震災で被災した岩手県陸前高田市の仮設住宅・仮設店舗のある地域で照明社会実験をした。夜にはほとんど真っ暗になる場所で防犯面にも課題があった。仮設店舗裏の軒先に40㍍ほどの「小明かり」をともし、道やほこらにも優しい照明を付けることで見違える光景ができあがった。住民からは「街が生き返った」と喜ばれ、期間限定の実験のはずが、大半の照明をそのまま寄贈した。「安全でホッとできる空間を生むことができるのが明かりの効用。地域の表情を変化させ人の想像力もかきたてる」

こばやし・しげお　1968年神戸市生まれ。東京工業大工学部建築学科卒。同大助手、武蔵工業大（現東京都市大）准教授などを経て、2011年から現職。

大学祭でも学生とともに、キャンパスをライトアップさせるイベントを開催。地域との一体感を出すこともできた。「イベントでなく恒常的な『明かり』を作りたい」。目標は明るく確かだ。　【澤圭一郎、写真も】

●この記事・写真等は毎日新聞社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。